

1. 兵役

(※ 関連資料のある箇所は太字で示してあります。)

1. 学徒動員

【木 田】最初に、後藤先生のお世話で、私の雑な**図書類、資料類(資料 1-1)**をこちらで引き取っていただきまして、本当にありがとうございました。今日の資料をつくろうと思って書庫へ下りていったら、ああ、(資料が)こっちへ来とるなあ(2004年3月/木田宏先生所蔵の図書類の一部を岐阜女子大学へご寄贈いただいた)ということがございましたけれども、本当にありがとうございます。はずかしいんですけども、ああやって少しでもお役に立つということができれば、私としては本当に嬉しゅうございます。ありがとうございました。それで前回(1995年/岐阜大学)もお話をしたんですが、私は学徒動員で、昭和18年の11月に召集を受けまして、広島第2部隊というところに入ったわけでございます。それからすぐ幹部候補生だということで、久留米に連れていかれて、久留米から、幹部候補生のまだ修行中に南方へ連れていかれました。どこへ行くのかわからなかったんですが、どうも船の方向を見ておると、10数杯並んだ船に護衛の艦隊がいっぱいつきまして、夜だけ行動をするんですね。はあとと思って見ておりましたが、結局南方へ行きました。

そのために日数が(かかるの)ですね。沖縄の列島に沿ってずうっと下がって行って、台湾の高雄の港に入りまして、これでさよならという、何というんですか、みんなそんな感慨を持って高雄の港からバシー海峡へ入っていったわけです。途端に夜、魚雷を受けましてね、もう本当にきれいなあとと思いながら、これ、どうなるかなあと見ていたわけですが、夏の夜の稲妻が空に光ると同じように、海面で、海の底で稲妻が光るんです。それはアメリカの潜水艦が発射した魚雷がぶち当たって炸裂している光でしてね、気味の悪いことが起こっているんですけども、きれいな光だなあとと思いながら、南へずっと下がっていきました。バシー海峡は一晩では渡れなかったんですね。もう一遍、島陰に隠れて夜を待って、フィリピンのルソンの沿岸に入るということをいたしました。幸いに、ルソン島に沿ってずうっと船が下がっていきまして、ここは片一方は陸地ですから、その間はあまり攻撃を受けることはなかったんですが、マニラへ上がりましてね、山下南方軍司令官、山下奉文中将が迎えに来てくれていて、ご挨拶をして、そしてマニラでこれでしばらくおるのかなあと思ったら、3週間ほどしてまた船に乗せられまして南方へ行っただけです。

そのマニラにおる間に、内地の方が毎日苦勞されたのかなあと思いますけれども、機銃掃射の攻撃を大分受けました。すごいもんですね。機関銃でバーンと撃ってくる、砂ぼこり上げて、弾がこちらへ走ってくるというの。しかし、しじゅう敵の飛行機がおるわけじゃありませんから、マニラの街をぶらついたり、フィリピン人の顔つきを眺めたりしましたが、私はそれからシンガポール、マレーシア、インドネシアと移動して動きました。こういうことを言うと悪いんですが、フィリピンの人が一番気の毒で、そしてつき合いにくいところがあるなあという感じを持ちました。何か猜疑心を持ってこっちを見ておるとい感じですね。日本から来て何じゃというような感じを受けたんです。これはマレーシアやインドネシアの現地で受けた感じと非常に違っていました。フィリピンというのは、スペインに本当にいじめられて、気の毒だったなあという。今でも全体としてごたついている点が多いんじゃないかと思えますけど、こういう体験をいたしました。